

安心感のある授業

2023. 8. 11

2011年、平成23年の9月から11月にかけて、同じ小学校に6回出かけたことがある。この学校は、学年1クラスで担任の先生が6人いる。6人全員が研究授業をやるのである。その指導助言者として呼ばれた。授業の学年、教材は違っても、同じ学校の先生方に、国語の授業の話を6回もするのである。これで先生方の授業が変わらなかつたらと思うと、責任重大である。

1年生の授業だった。斉読を1回行った。その後、指名読みを行った。この指名読みが気になる。何のためにやるのか。それが明確であればいいのだが、多くの場合は、そうではない。小学1年生である。みんなの前で上手に読めればいいのだが、そうでなければ、どうだろう。自信をなくし、国語嫌いになっていくだろう。

「たちまちって、どんな感じかわかる？」子どもたちからは「すぐに」「はやく」と声上がる。ワークシートにめあてを書いた。「先生といっしょに」と指示をした。大事なことである。めあてを青枠で囲んだ。青がだめというわけではないが、黒板の青は見づらい。めあては、「どうしてすぐにげんきになったのかな。」だった。「どうして」と聞かれば、「～から」となる。すなわち、思考が進む。みんなで2回、めあてを読んだ。これもいい。ワークシートのめあてを書く欄がやや小さかった。このようなことは多い。授業者が、実際に書き込んでみれば気づくことである。そこまでやる先生は少ないのかもしれない。

このワークシートだが、A4横判で、めあてを書く枠と2～3の枠があるだけというものが多い。果たして、ワークシートである必要があるのだろうか。ノートでいい、いやノートの方がいい。ワークシートは準備しなければならないもの、使うのが当たり前という誤解があるようである。

「自分の考えをワークシートに書きましょう。文章で書いてもいいし、短いことばで書いてもいいです」このような指示をよく耳にする。ぜひ、文章で書かせたい。中には、まだ書けない子もいる。個別指導の出番である。文章で書けないと、文章で話すのはむずかしくなる。短いことばを認めてしまうから、単語でしか話せない子になってしまうのではないか。

「自分で一人3回、りっちゃんになったつもりで練習してみて」「みんなで読もうか」まとめの音読での「もっとりっちゃんになれる人？」いずれも見事である。これらは、経験豊富な低学年の先生に見られることである。若い先生方が見ると、きっと勉強になるだろう。

この授業では、子どもたちはよく反応し、活動していた。だが、めあてとまとめはずれていた。このようなことはよくある。一貫性・整合性のある授業が求められる。この授業は、小学1年生の午後の授業だった。それでも、子どもたちは集中し、意欲的に活動していた。まるで、何かに包まれているような安心感のある授業だった。授業者の持ち味が生かされていた。そして、授業者が今まで培ってきた授業力に裏打ちされた授業だった。